

1 大手

現在神社の入口となっている武田館の南側は、かつては土塁が繋がっていて、東側にある大手口が館の正門となっていました。門の前にはいくつもの石塁や土塁が設置され、敵は真っ直ぐに入る事が出来ませんでした。武田時代には曲がる回数が5回程度だったものが、後には20回ほど曲がらなければ主郭に入れない構造になっていました。



2 三日月堀と角馬出

発掘調査により、現在残る角馬出の石塁の下から、武田氏の城の特徴と言われる三日月堀が確認されました。これは武田氏滅亡の後、新統治者の権力を誇示するために、かつての統治者の象徴でもあった丸馬出と三日月堀を破却し、その上に新たな石塁（豊臣：加藤時代）を築いたためと考えられます。



3 厩跡

発掘調査の中で発見された柱穴は、特殊な配列と古い絵図から厩跡だった事がわかりました。石塁との関連性を感じる配置から、武田家滅亡後の勢力が作ったものと考えられます。



4 堀と石垣

武田館の周囲は、深い堀と石垣を配した高い土塁に囲まれていました。山裾に築かれている地理的環境から、堀の南半分には水が張られていましたが、北側は空堀となっていました。大手入口や、主郭から西曲輪へ渡る土橋の両側などに現在も当時の石垣を確認する事ができます。



5 主郭・6 宝物殿

政務が行われた東曲輪と、当主の日常の居住空間があった中曲輪とに分かれています。中曲輪には居館と庭園があった事が絵図にも描かれています。かつては中央に加藤光泰が築いたとされる石塁があり、発掘調査の結果、それらを裏付ける痕跡（池跡や石列など）が確認されています。当初の居館は將軍邸である花の御所（室町第）と同様の方形居館であり、建物配置や名称にも將軍邸の影響が見られます。宝物殿には、神社に伝わる武具や絵図・古文書など、武田家にまつわる貴重な資料が多数展示されています。裏手にあたる場所には毘沙門堂や不動堂がありました（非公開）。



庭園跡付近に祀られている榎天神

7 井戸

館のほぼ中央に位置する井戸で、古図にも記されています。信玄公ご使用の井戸とされ、今でも水が湧いています。



8 姫の井戸

信玄の姫が誕生の折りに産湯に使用したことにより、この名がつけられたといわれています。また、「茶の湯の井戸」とも言われており、館内で茶を点てる時にこの井戸水を使用したと伝えられています。井戸からは茶釜などの品々が発見されていて、これは勝頼が京よりの客をもてなす茶会の折りに使ったものといわれています。現在は宝物殿に展示されています。



心地良い音色の水琴窟

9 天守台（非公開）

通常は立ち入り禁止で見学はできません。武田家滅亡後に入甲した織豊系領主によって築かれた野面積みの石垣が残されていて、調査の結果、御殿跡の礎石が確認されました。甲府城完成後に破城され、石垣の南東部コーナーの石垣が人為的に破壊されています。台上に残る、「武田法性院」と呼ばれる信玄を祀った祠は、天明元年に神社北側の日影村民の手により再建されたもので、江戸時代には現在の菱和殿付近にありました。

武田氏館（躑躅ヶ崎館）見所MAP



出土した馬鎧の断片



梅木堀柱元に祀られる文化元年（1804）銘のある馬頭観音



西曲輪南虎口から発見された馬骨

武田騎馬隊は無かった!?

武田の軍隊といえば、毎年4月に行われる信玄公祭りの騎馬行列のように、騎馬隊を思い浮かべる人も多いのではないのでしょうか。でも実は、武田軍に騎馬隊は無かったという研究があります。色々な資料を調べても、むしろ騎馬の数は他の戦国大名より少なかったそうです。ではどうしてそんなイメージが？それは長篠の合戦に触れた織田方の文献に多く登場したからだと思います。信長の武功を強調する為とも言われますが、死を覚悟して騎馬で敵陣に向かった武田軍の勇猛さが、強烈に印象づけられた所為かもしれませんね。

10 堀・石垣・土橋

主郭と西曲輪を結ぶ土橋や深い堀が、旧景をよく残しています。



11 西曲輪

信玄の長男義信の婚姻に際して、新居として造られた曲輪といわれていますが、はっきりとは分かっていません。主郭とつなぐ土橋付近に、絵図にも見える井戸が残っていますが、現在は水はありません。曲輪は北に向かって序々に高く3段のテラスとなっていて、曲輪の南北出入口に枡形の虎口が設けられました。



12 枡形虎口と礎石

後世の攪乱により当時の様子はほぼ残っていませんが、豊臣時代に改修された石垣下部に、武田時代の門の礎石を確認することができます。その様子から、北側の枡形虎口と大体同じ形態であったと考えられます。



13 角馬出

平成元年の発掘調査で、馬出土塁の下から馬の骨が1体分発見されました。これは全国的にも珍しい事例です。頭を北側に、顔を西方に向けて筵に覆われていました。また詳細に骨を調べた結果、良質な餌を与えられ、大事にされていた事が分かりました。もしかしたら、曲輪を作る際の生贄として埋められたのかもしれない。



梅翁曲輪の水神様

14 梅翁曲輪

武田氏が滅亡し、徳川家康が甲斐国を治めるようになってから、重臣である平岩親吉によって新たに造成された曲輪です。江戸時代になり、柳沢氏が甲府に入った頃、下級家臣の組屋敷が建てられるようになりました。現在は公園・宅地化していますが、南の一部と西側の堀（松木堀）は良く残っています。



15 枡形虎口

発掘調査で馬鎧の一部が発見されています。漆塗の皮製品で、金箔が施されていました。また、曲輪が作られた当初は土橋から真っ直ぐ2つあった門に入ようになっていましたが、後に一度曲がらなくなると入れない構造につり替えられました。門の規模を調査したところ、造新府城の乾門と類似していることから、ここから移築した可能性も考えられます。整備が進められており、土塁石垣や石階段が見所となっています。



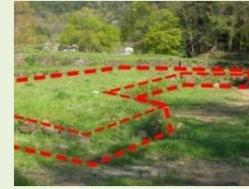
16 稲荷曲輪

屋敷神として祀っていた石和の御崎明神を、信虎が稲荷社としてこの場所に勧請したことから、稲荷曲輪と呼ばれています。武田氏滅亡後に御崎神社として美咲二丁目の現在地に再勧請されました。現在は3基の祠が残り、往時をしのばせています。



17 味噌曲輪・18 無名曲輪・19 御隠居曲輪

最初主郭のみの単郭でしたが、信玄時代以降に序々に整備・拡張されていきました。御隠居曲輪は大井夫人の隠居所だったと言われています。現在遊歩道が整備され、今も残る土塁の様子を見る事ができます。



味噌曲輪に残る角馬出の石積み土塁

境内では、葉が3本ある「三葉の松」が見られることでも知られています。昔から日本では、豊饒と平安をもたらす神霊が、松を伝って地上に降臨すると信じられていて、昔物語や伝説にも登場し、神聖な木として崇めていました。新年の家門に飾る角松は同じ意味で神の降臨を願ってのことです。「三葉の松」は全国でも珍しく、その姿から「夫婦和楽・家内安全」を象徴して、その松葉は小金色になって落葉し、身につけると「金運」に御利益があるとされ、別名「金銭松」ともいわれています。



平成

武田城下町絵図

文化庁
平成25年度 地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業



武田の郷めぐりに
いざ出発じゃ！



イラスト：もち

作製：山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508 山梨県甲府市下首根町923
TEL 055-266-3016
<http://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/>
協力：甲府市教育委員会
白根桃源美術館
禁無断複製・掲載

寺社

□1 恵運院

武田信虎の父信繩の菩提寺として、武田家の厚い保護を受けたお寺です。武田信廉筆による県文化財「雪田宗岳和尚画像」を収蔵しています。信玄手植の梅と言われる梅があり、由来を書いた「梅花の碑」が境内にあります。裏山の恵運院山には、危急を知らせる警鐘が置かれました。



□2 興因寺

平安時代創建（当初は天台宗）の由緒を持つ、山梨を代表する曹洞宗の寺院。後陽成天皇の第八皇子良純親王が甲斐に配流された際に滞留した寺で、「水手の水伝説」が残ります。柳沢吉保の家老柳沢権太夫保格夫婦の墓があります。



□3 積翠寺

歴史は古く、行基開創の縁起をもちます。石水寺とも書きました。信虎が築いた要害城の南に位置し、大永元年（1521）駿河の福島正成との戦いの時に、大井夫人はこの寺に避難して嫡子太郎（晴信・信玄）を出産しました。その時に使ったという産湯の井戸が大切に残されています。



□4 長宝寺

下積翠寺町に「釈迦堂」の地名が残り、公会堂に廃寺となった長宝寺の本尊「木造釈迦如来坐像」（平安：市文化財）が安置されています。付近に武田義信が住んでいた屋敷がありましたが、婚姻を機に、屋敷地は周辺を領有していた武田家家臣駒井高白齋に与えられました。門と建物が長宝寺に移されたといわれています。



駒井高白齋：

『高白齋記』（『甲陽日記』）を記した。武田家の家訓である「甲州法度之次第」の奏上にも関わった、信玄・勝頼に仕えた重臣。

□5 宝積寺

駒井高白齋の子、右京進昌直が開基となって永禄3年（1560）に創建されました。右京進の墓と伝わる五輪塔が残されています。



□6 愛宕社（宝蔵院）跡

古府中町日影公会堂前に秋葉社の祠2基と道祖神1基が祀られています。付近一帯が、武田氏時代の愛宕社の社地でした。



□7 禅林院

能成寺（甲府五山）の隠居寺として開創されたと伝えられます。武田館の鬼門（北東）に位置していた為、地子が免除されていました。開山の竺英和尚は武田氏の親族でした。



□8 若宮八幡宮

通常八幡宮で祀られる応神天皇ではなく、その子である仁徳天皇を祀っていることから「若宮」八幡宮となりました。地元では氏神さんと呼ばれ親しまれており、かつては境内で雨乞いの祭りが行われる事もありました。



□9 興国寺

武田不動尊が祀られています。毎年2月に住職がご本尊の掛け軸を持って組の家々を回り、家内安全等を祈ります。



□10 武田神社

江戸時代、松や竹が生い茂り荒れてはいたものの、中曲輪には法性大明神を祀る石祠がありました。古い絵図には正方形の石積みや、丹塗りの柱を持つ二階建ての社が描かれているものもあり、信玄を祀る人々により大切にされていた事がわかります。明治になり、祠は天守台の上に移され、立派な社殿が造られました。



□11 古八幡社

信虎が甲府を開く際、石和で甲斐国総鎮守として祀られていたのを、館の西側に移し、府中八幡としました。神社統制の中心に位置づけられていて、神社各社には諸役が課せられていました。甲府城築城に際し、宮前町の現在地に遷座されましたが、多少位置はずれているものの、旧地にある峯本公会堂裏手に古八幡としてそのまま現在も残されています。



□12 祇園寺（峯本院・牛頭天王社）跡

武田館の裏鬼門（南西）鎮護の為に建てられた清光山峯本院を別当として、疫病除けの神である牛頭天王社が祀られていました。甲府城下町建設の時に祇園寺として愛宕町に移され、現在は片足を垂らした半迦像の珍しいお地蔵様と、道祖神が路傍で大切に祀られています。



□13 大神宮（伊勢の森）跡

信虎の時代、躑躅ヶ崎館鎮守の為に、伊勢から屋形二丁目のお伊勢の森へ大神宮が勧請されました。伊勢外宮の御師幸福出雲が、古府中に屋敷を与えられ、大神宮は後に横近習の現在地に移され、祀られています。残念ながら、現在この場所には往事を偲ぶものは何もありません。

□14 金山神社

鍛冶小路の北端の畑の中に、小さな祠が残されています（個人宅）。小路周辺に住んだ鍛冶職人達により祀られ、かつては毎年8月15日の府中八幡宮（古八幡）の祭礼の際に矢の根が献上されていました。



□15 永慶寺跡

江戸時代、柳沢吉保の菩提寺である竜華山永慶寺があった場所です。子の吉里が大和郡山に転封された際、吉保夫妻の墓は恵林寺に移され、寺は破却されました。現在は護国神社となっています。この永慶寺の山門が大泉寺の総門として移築されたと伝えられています。



大泉寺の総門

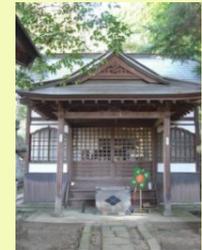
□16 円光院

武田信守が父信重の菩提寺と定めた石和の成就院を、信玄が甲府に移し三条夫人の墓所とした事から、夫人の法名に因んで改称しました。寺宝の勝軍地藏像と刀八咫沙門天像は信玄が陣中の守り本尊として崇拝していたものを遺言により納めたものと伝えられています。甲府五山。



□17 大泉寺

大永年間に、武田信虎の開基で創建されました。信虎の菩提所で信玄・勝頼の三代の廟があります。甲斐曹洞宗常法幢七カ寺の一つです。息子である武田信廉の筆による「絹本着色武田信虎像」（国文化財）を始め、数多くの文化財が残されています。



武田三代廟所

□18 甲斐惣社八幡宮

信虎が石和から甲府の館の西に移した府中八幡を、甲府築城の際に名を改めて現在地に移しました。府中五社。



□19 華光院

県内で数少ない真言宗寺院の一つ。信虎が創建した荒神堂を天文20年（1551）年に信玄が現在地に移し、別当寺として華光院良林寺としました。境内の太子堂は、柳沢吉里が転封される時、甲府城内から移した聖徳太子像を祀ったものとされます。毎年4月に行われる、山伏の火伏せの祭り「火渡り」でも知られています。



太子堂

□20 愛宕神社

信玄が相模国愛宕山から持ち帰った勝軍地藏（愛宕権現）を、鬼門守護のために聖道小路に勧請し、愛宕山宝蔵院が別当を務めました。天正12年（1584）、甲府城の鬼門除けとして現在地に再勧請され、それにより、それまで甲斐奈山と呼ばれていた背後の山が愛宕山と呼ばれるようになりました。



見どころ



□21 八雲神社
武田館の裏鬼門の地にあった峯本院と牛頭天王が、甲府築城に伴って祇園寺として愛宕の地に移されました。明治の神仏分離によって八雲神社となり、現在に続いています。

□22 妙遠寺

飯富源四郎（山県昌景）が開き、信玄の局で小幡山城守の妹である小宰相が再興したと伝わります。戦国時代には穴山小路にあったとされ、寺宝として、武田陣中守護の毘沙門天や、加藤清正が朝鮮出兵の際に持ち帰ったとされる玉簾などがあります。



□23 行蔵院
本尊の武田不動尊と、山本勘助の念持仏と伝わる不動明王像が安置されています。

□24 満蔵院

大永2年（1522）に武田信虎が霊夢を感じ、像を造って祀った清水寺と、信玄が後に建てた毘沙門堂（正覚寺）の二寺を合わせて万蔵院と改称しました。近世になって現在地に移り、字も満蔵院となりました。



□25 法華寺

天平13年（741）に全国に造られた国分尼寺の1つで、甲府城築城に伴い現在地に移されました。徳川将軍家の祈願所でもあり、「三葉葵」の紋の使用を許されました。寺の裏に、甲府城三の堀に伴う土塁跡と見られる盛り土が現在も確認できます。



□26 清運寺

武田二十四将の一人横田備中守高松が葬られたお寺です。加藤清正を所願成就の神「せいしょこさん」として祀っています。



□27 六角堂（西昌院跡）

信玄の姉（信虎の側室とも）の御西の菩提所として、勝頼が天正3年（1575）に創建し、近世になって現在地に移りました。



京都山科の六地藏寺から六体の地蔵を迎え、六角地蔵堂に安置して、いきましたが、大正5年の地蔵祭りの時に三体と建物（現在のものは再建）を焼失してしまいました。

□28 旧柳町大神宮跡

伊勢から穴山小路のお伊勢の森に大神宮が勧請されました（個人宅）。現在は柳町に移され、祀られています。



□29 金幣稲荷

尊躰寺の旧地で、徳川家康が天正10・11年に来甲した時に在陣した事を記した碑が残っています。寺は甲府築城に伴って城東の現在地に移され、明治になって付近に遊郭が作られた時に、遊女の守り神として稲荷が祀られました。



□30 要法寺

武田信玄を開基、次男竜芳を開山として永禄11年（1568）、盲目だった竜芳の病氣平癒を祈願して創建されました。明治の火災により多くの史料を消失しましたが、残された梵鐘の銘から由緒を辿る事ができます。



□31 梅屋敷天満宮

上杉謙信の家臣だった大熊備前守が信玄に帰属し、屋敷を構えた場所で、屋敷神として祀った天神社が今に残っています。付近には梅の樹が多く、江戸時代から梅屋敷と呼ばれ親しまれていました。



□32 御崎神社

もとは石和信光の館鎮守御崎明神でしたが、信虎が甲府へ開府した際、館鎮守稲荷明神として武田館の北の稲荷曲輪に再勧請しました。後に甲府築城の際に、甲府城の乾の鎮守として美咲の現在地に移されました。府中五社。



□33 法泉寺

武田信武が創建、後に菩提寺となります。武田氏が滅んだ際、京都に送られた勝頼の首は妙心寺に葬られ、その遺歯を秘かに譲り受けた快岳周悦和尚が持ち帰り、信武の墓の隣に葬りました。甲府五山



甲斐善光寺

東日本最大級の木造建築である甲斐善光寺は、武田信玄が信濃侵攻を行い上杉謙信と戦った、第3回川中島合戦の後に、長野善光寺の本尊阿彌陀如来像、僧侶や門前町の商人・職人に至るまでを甲斐の板垣の里に移動させ建立したお寺です。戦火から仏様を守る為に避難させたと言われますが、実は善光寺信者の心を引きつけ、人心を掌握する為だったようです。この時に、あまりの重さに引きずって持ってきたといわれる梵鐘が、本堂東の鐘楼に掛けられます。よく見ると、この時についた傷や、取れてしまった鋸の跡が残っています。また境内には、豊臣秀吉の命で甲府支配の為に来甲した加藤光泰の墓や、甲府勤番士の墓などがあり見所満載です。



武田神社から車で約15分

○1 聖道墓

武田竜宝の墓と言われ、「お聖道さま」と呼ばれて大切にされています。屋敷がこの付近にあったといわれ、聖道小路が通っていたともいわれます。



○2 躑躅ヶ崎亭跡

武田信玄が風景を楽しむ為の東屋が建てられました。現在は金比羅さんが祀られています。躑躅ヶ崎に続く竜華の峰は江戸時代に甲斐八景の一つに挙げられ、名月の観賞地として和歌にも詠まれました。



○3 武田信玄火葬塚

信州駒場で病死した信玄の遺骸を、武田二十四将の一人、土屋昌統の屋敷だったこの場所（かつては山本勘助の屋敷があったとも）に運び、秘かに火葬にしたといわれています。魔縁塚とも呼ばれていました。江戸時代にこの地を発掘した所、石棺が出てきましたがまた埋め戻し、墓石などを整備したといわれています。以来円光院と地元の人々により、信玄の命



日である4月12日に法要が行われています。この地には「岩窪のヤツブサウメ」と呼ばれる県文化財（天然記念物）に指定されている珍しい梅の木があります。



○4 長坂長閑斎屋敷跡

屋形の広小路公会堂の前に「長坂左右衛門尉長閑斎邸跡」の碑が建てられています。長坂鈞（長）閑斎は信玄・勝頼に仕えた老臣で、愛宕神社にある釣閑石は彼の塚とも言われています。

